第３分科会　　<研究課題　　人間性と専門性を高め　生きる力を育むための現職教育と校長のあり方>

研究発表:～「今，その子らしさを伸ばすためにこうしている」ということを信念をもって，はっきり言える教育実践をする教職員の育成と校長の在り方～

大分県　中津市立北部小学校　　伏　見　豊　重

Ⅰ　趣　　旨

未来の日本を創る心豊かでたくましい子どもを育むことは，緊急の課題として位置づけられ，教育課程が前面実施されてから３年目を迎えている。

国際化の進展・情報技術の高度化，生徒指導上の課題への対応等，教師に求められる資質も多様化してきており，教育改革の成否も教師の意識改革にかかってきている。また，教師の資質低下・指導力不足教員の対策が指摘されてきた。

これら多くの課題に対応できる，教師の能力や資質の育成，専門的な知識･技術をもった人間性豊かな教職員の育成は喫緊の課題である。

中津市の教育は，１９７２年以来「一人ひとりを大切にする教育」を目指して実践されてきた。

「教育は子どもの心をしっかりつかむ」ことから始まるという原点を追求することにより，具体的実践・研究に取り組んでいる。

そこで，中津市校長会では，大分県小学校校長会研究方針を受け，「一人ひとりを大切にする教育」をより確かなものにし，「生きる力」の育成を目指した新教育課程の理念を具現化していく必要がある。そのためには，校長の指導性を発揮するとともに，教職員の資質の向上と学校経営参画意識をもたせ，組織体として機能する学校づくりの取り組みを進めていかなければならない。

Ⅱ　研　究　の　概　要

１　大分県小学校校長会の取り組み

（１）　基本方針

大分県小学校校長会は「愛と信頼」を基調として，人間尊重の理念のもと，平成１２年度から，「新しい時代を拓き，国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目ざす小学校教育の推進」を研究主題に掲げ，生涯にわたって学び続け，社会の変化に主体的に対応する，心豊かでたくましく生きる児童の育成を目ざす教育課程の編成と実施に努めてきた。

しかし，その間も科学技術の進歩，経済不況，国際化，少子高齢化，などを背景に社会の変化は著しく加速され，多くの分野で大幅な改革が実行されてきている。教育の分野でも，変化に対応すべく，目標，構造，内容，方法等全ての場面で様々な変革が提示されている。

平成１４年度は，完全学校５日制及び小学校学習指導要領の全面実施など，格段の教育改革のスタートの年であった。「ゆとりの中で生きる力を育む」との趣旨の具現化のため，各学校では校長のリーダーシップの下，その総力を挙げて学校，地域の実態に即した特色ある学校づくりに創意ある教育課程の編成，実務に努めてきた。その結果，県研究大会や各郡市の研究場面で確認されたように

○生きる力を育むための，学習の総合化や組織化。

○地域や学校の実態を生かした特色ある学校づくりと開かれた学校づくり。

○基礎・基本の確実な定着と学ぶ意欲を形成する指導法の改善。

○「総合的な学習の時間」の効果的な展開と体験学習　の組織化。

等々の課題に対して，教師の意識改革が進み，学校独自の解決の方策が計画，実施され多大の成果を挙げてきた。

しかしながら，完全学校週５日制の下，指導時間数や学習内容の削減，総合的な学習の時間の導入等の新しい学習指導要領の実施にかかわっては，学力低下等を理由に不安視する声も無視できるものではない。

平成１５年度は，更に様々な改革の理念や趣旨を学校から，各教室，個々の子どもたちに反映される一層の具現化が求められる。そして，教育実践の過程を保護者や地域によりオープンに公開する責任が生まれると考える。

今後，教職員の一層の意識改革と厳密で徹底した学校の自己評価や地域・保護者からの学校評価を位置づけた学校経営がもとめられるものと考えられる。

教育改革期の中で校長の果たす役割と責任は大きい。平成１５年度の県小学校長会は，教育の不易と流行を見誤ることなく，２１世紀を開く子どもの育成を目指す明確な学校経営ビジョンを確立すること，更に教師と共に自らの意識を改革し，校長としての指導性を高め，強力なリーダーシップのもとに学校経営を推進する力量を高めることを研究の目的とする。

2　中津市の取り組み

（1）「一人ひとりを大切にする教育」の確立を目指して中津市の教育は，１９７２年以降「同和」教育の推進を目指して実践が積み重ねられてきた。「一人ひとりを大切にする教育」をその理念に掲げ，「その子らしさを伸ばすためにこうしている」と自信をもっていえる教育実践を目指して取り組んできた。

具体的な実践を進める上で，４つの柱を掲げ取り組んでいる。

①　一人ひとりの子どもを理解するために，よりよい人間的なふれあいをもつ。

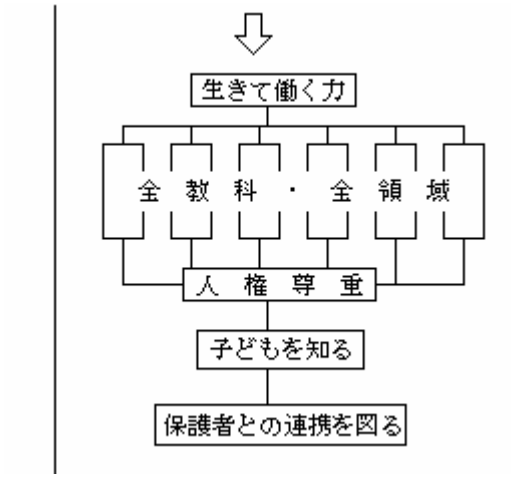
②　差別を見抜き・差別を許さず・差別と闘う子どもや認め合い支え合う学級集団をつくる。

③　すべての子どもにわかる授業を創造するとともに，遅れた子どもに学力の向上を図る。

④　保護者との交流を深め，家庭や地域における子どもの生活実態をつかみ，学校教育活動に生かす。

（2）　中津市の教育の基本構想

目標「一人ひとりを大切にする教育の確立」を目指して



「今，その子（一人ひとり）らしさを伸ばすためにこうしている。ということを信念をもって，はっきり言える教育実践をする。」

（3）　目標につながる具体的な取り組み

①　生きる力を育むための，学習の総合化や組織化

ア　「希望実現カード」の取り組み

・系統的，継続的な取り組み

②　地域や学校の実態を生かした特色ある学校づくりと開かれた学校づくり

ア　日常的な家庭訪問

イ　夏季休業中の家庭訪問

ウ　地区連絡会「網の目活動」の実践

・情報交換会と情報の共有化

・学校の情報を地域に下ろすと共に，地域の情報を学校教育活動に生かす。

・地域の教育力を高めていく取り組み

・校内情報交換

エ　学校評価と開かれた学校づくり

③　基礎・基本の確実な定着と学ぶ意欲を形成する指導法の改善

ア　楽しい，わかる授業を創造する

・教科指導におけるＴＴと少人数指導

・チャレンジタイム（５校時前の１０分間）漢字，百ます計算

・毎朝の１０分間読書

イ　自主編成による国語科表現「にじ」の活用

・子どもの表現力を高めるための取り組み

ウ　学力診断テストの実施と分析

④　「総合的な学習の時間」の効果的な展開と体験学習の組織化

ア　「ようこそ先輩」の授業の取り組み

イ　学社連携（融合）の取り組み

・公民館活動と総合的な学習の時間の連携

（4）目標を達成するための校内の組織及び運営

①　校務分掌

ア　機能する校務分掌づくり

・適材適所…責任あるもの，教育の向上

・子どもをどのような方針で，どのように育てていくかという意識の高揚を図る。

イ　教職員…学校の中で，このような立場にあって，このような役割を果たさなければならない。

②　推進委員会

ア　学校をどうころがすかという見通し（全体構想）を持ち，核となって全体をリードしていく。

イ　一年間を通して，学校運営参画意識を持って臨む教職員の意識変革。

ウ　教育課題の解決に積極的に参画する。

③　校内研究

ア　厳しさと楽しさのある研究体制

・厳しさの中に楽しさを求める学校づくりを進める。

イ　一人ひとりを大切にする教育を推進する。

④　時間を生み出すために

ア　会議の精選や能率化を図る。

イ　諸々の教育活動の見直しを図る。

子どもの心をつかむ…教児一体で取り組む。

ウ　教育観を変える。（意識変革）

⑤　教師の資質や力量を高める…教師には，学級を育てる，子どもを育てるという大目標を持つ必要がある。

3　研究の概要と成果

中津市校長会では，事例研究を通して，より実効性のある組織としての取り組みのあり方を探っていった。

（1）事例１…初任者研修の取り組み（Ａ小学校）

①　初任者担当を中心に，管理職を含む全教職員で育てていく。

ア　管理職，事務職，養護教諭全てに指導時数を割り当て指導してもらう。
イ　初任者に対して，全教職員が指導案を提示・授業の公開・事後検証をする。
ウ　初任者研修を学校研修の柱の一つとする。
②　体験学習を通して，種々のケースの指導法を身に付ける。
ア　生徒指導上あるいは教育相談などの諸問題が発生したときは，必ず初任者をその場に出席させる。
③　成果と課題
ア　教師のとしての力量が高まった。
イ　時間調整…初任者研修の時間の確保の困難さ
ウ　初任者研修の出張時の授業に関わること
エ　教育現場の様々な問題
なお厳しい初任者研修の必要性

（２）事例２…指導法の工夫改善・学力向上の取り組み（Ｂ小学校）
①　基礎的な学力の積み残しの問題
②　「わかる喜び」や「自ら学ぶ喜び」をを持てる子どもの育成
・少人数指導やＴＴ指導の良さを取り入れた指導法の確立
ア　全教職員で一貫して取り組む必要性があり喫緊の課題として
（ア）基礎的な学力の向上・推進
（イ）自ら学ぶ力の育成
イ　取り組みの重点
（ア）授業改善，指導法の工夫改善
（イ）学級・学年経営の充実
（ウ）ＴＴ指導に(少人数指導)による指導法・内容の実践研究
ウ　具体的な取り組み
（ア）学級・学年経営の充実
・学年副担任制の実施…副担任を中心に，計画的な授業実践を行う学年部研究の強化
（イ）指導法の工夫改善・学力向上
・チャレンジタイムの実施（百マス計算・漢字・その他で実施）
・スタディタイム（算数科における単元途中でのつまずき把握と解消）
・全学年で算数科で複数教師による指導（少人数，Ｔ・Ｔ）を実施
・標準学力テストの実施と分析（自校，年２回）
・算数科の学習についてのアンケートを全学年で実施と分析（ＴＴ，少人数，チャレンジタイム，マイスタディ）
・１０分間読書（朝）の実施
・０時（既習の学習内容のつまずきの発見・解消）
・ねらいや学習過程に応じた支援，個に応じた支援の改善と工夫
・目標に応じた単元の評価計画や子どもによる自己評価の改善と工夫
◎指導の「つけ（学習・生活）」を上学年に送らない。
◎学級担任による「問題の抱え込み」をなくす。

（３）事例３…１０年経験者研修の取り組み（Ｃ小学校）
①校外研修（１７日間）…県教育センター等での研修
②校内研修（１７日間）の取り組みについて
ア　校務分掌に１０年研修担当者（校長）を位置づけ，対象者だけでなく，全教職員に研修を明確にした。
イ　校長が研修計画を立て，校長・教頭・研究主任・児童生徒支援教員を中心にして，本校の教育課題や教員としての資質等を指導した。校長は教頭と他の指導者と綿密な連携を図り指導することに努めた。
ウ　校長は，学校の状況等を考慮し，適宜年間指導計画を見直した。
エ　重要な課題である指導法の工夫・改善については，１１月に全教職員に授業を公開し，指導・助言を受けた。校長は，別に指導・助言を行った。また他の教員の授業を積極的に参観するようにした。
オ　他の教員に対して，日頃から気づいたことがあればその都度指導・助言するようにした。（日常実践に生きる指導）
カ　研修を通して，校長を中心に技術的な事ばかりでなく，教員としての考え方を指導することができた。若い教員の立場からの学校経営参画意識を持つことの大切さを指導した。しかし目標に準拠した年間評価計画等の指導が，今後の課題として残った。

４，本校の取り組み
（１）　本校の教育目標
・しなやかな知性と人間としての豊かさをもった活力ある児童の育成
・求める子ども像…学びを楽しむ子，ふれあいを楽しむ子，運動を楽しむ子
・学校像…発想と工夫のある学校，温かさあふれる学校，遊び文化のある学校
・教師像…殻を破り研修する教師，児童に温かく寄り添う教師，子どもの夢に応えようとする教師（温かさ・厳しさ・感動），保護者の願いに応える教師
（２）　基礎・基本の定着
・指導法の工夫改善（少人数指導，Ｔ・Ｔ）
・朝の１０分間読書
・如水タイム１０分間（算数・国語のドリル）
５校時前の１０分間を設定
（３）　研修
・統計教育の研究指定を受け，研究主任を中心に研修を実施，全教師による研究授業
・課題解決学習（生活科・総合的な学習の時間）
・教師の資質や力量を高める

（４）　差別事象から学ぶもの
・子ども理解，保護者との連携，関係機関との連携
・職員研修と保護者との学習会の実施
・教職員の意識変革を図る…差別の現実に学ぶ
・人権学習の見直しと徹底…心にしみこむ学習
（５）　学校完全週５日制の受け皿
・「子ども遊び支援ボランティア」の活動
・生きる力…子どもを高める活動
・地域のボランティアや元教師によるボランティア活動との連携
・教職員…その子らしさを伸ばすためのボランティアの人たちとの連携
（６）　保護者との連携「網の目活動」
・１教師が約２０世帯を受け持ち，地域に足を運ぶ
・「ふれあい」の発行し持参する。回覧したり，情報交換したりする中で子どもの様子を知る。
・「校内情報交換会」での情報交換…児童理解と生活指導の共通理解。学校教育活動に生かす。
（７）生活指導・教育相談部の活動
①問題の概要
・不登校やいじめ，その他学習に困難をきたすなどの問題で，担任だけではかかえきれない状況が発生した場合，担任をサポートし問題解決に努める。
・担任は，責任感から必要以上に問題を抱え込みがちになり，他の教員は口を挟みにくい。このことは，問題の早期発見を遅らせ，指導の適宜性を欠いてしまう。
②組織・運営の見直しと校務分掌への位置づけ
・校長・教頭・生活指導主任・人権教育主任・養護教諭・該当の担任（少人数で動きやすい体制作り）
③指導の基本的方針
・一人ひとりの子どもの個性・特性・生活背景・個人的な課題を十分に把握し，個に応じた指導の手立てを明確にする。
・いじめ・不登校・問題行動など，あらゆる場や状況において，見過ごすことなく愛情を持って，きめ細かな一貫性のある継続指導を行う。
・担任教師がひとり背負うのではなく，情報を交換しながら共同して対応を進め，同時に教育力の向上に努める。
・保護者・幼稚園・小中学校・地域の諸機関との連携を密にして，適切な対応を図る。
④「生徒指導の原点は落ち着いた学習から」を再認識し学習意欲を高める授業方法・学習形態・学習材料の工夫・改善など，教師の意識改革，資質向上を図る。

Ⅲ　まとめ

１　成果と今後の課題
（１）成果
①情報の共有化と児童理解の進展
ＴＴ，少人数指導の充実に伴い，ＴＴ担当教師と担任の情報の共有化が進展した。特に，理解が遅れがちな子どもに対して，個の学習する力（関心・意欲・態度や知識・理解等）だけでなく，生活の様子も話題になり，子どもの学習・生活上の様子を教師が共有する状況が生まれ，一人の子どもの多面性に目が向き，児童理解が進展した。
②教職員の役割の明確化
児童理解の進展にともない，学習面だけでなく，集団不適応の子どもや児童間のトラブルへの対応，それに伴う保護者との対応，関係機関との連携などの役割を，教職員が積極的に果たせるようになると共に，役割が明確になった。（教師の指導・支援，子どもの指導・支援・ケア，管理職への報告・連絡，関係諸機関との連携，保護者への対応・ケア）
③保護者・関係諸機関との連携強化
多面的な子どもとらえにより，子どもの見方が改められ，積極的に専門機関や関係諸機関との連絡・相談が行われると共に，保護者理解に努める取り組みが見られるようになった。
（２）今後の課題
①　校長は，常に高いアンテナを張り，状況の早期把握に努める必要がある。日頃から積極的に子どもや保護者と関わったり，教職員からの情報収集に努め，課題を見抜ける感覚を磨いていく必要がある。
②　学校が組織体として機能するためには，教職員個々の特性を十分に理解し，特性にあった配置をすることで機能の向上を図っていく必要がある。校長は，コマの心棒のように指導性やリーダーシップを発揮して，コマ（学校）がぶれないように回ることである。
③　「その子らしさを伸ばすために，こうしている」という基本方針を，校長も教職員も研鑽を積み重ね，今後も地道に実践・継続していく取り組みが大切である。